② 福島県大玉村／えびすこ市・場 渡辺吏さん

県内に散らばる福島県富岡町民の生活を支える

福島県内を含め全国に散らばった福島県富岡町民。富岡駅前で食料品店を営んでいた渡辺吏（つかさ）さん(54)は、かつてのお客さんのため、安達太良山の麓にある仮設住宅に店を構えた。共同出資によるこの店を拠点に、渡辺さんは富岡町民向け「御用聞き」業を模索している。

東京電力福島第一原子力発電所が立地する福島県大熊町の南隣にあるのが富岡町。現在でも町全域が警戒区域に指定されており、住民は戻っていない。

定住者のいる町として機能するまで何年かかるのか、全くメドが立っていない。原発事故で大きな被害を受けた町村のひとつである。

ＪＲ常磐線・富岡駅前の商店街で食料品店を営んでいた渡辺吏さんは現在、富岡町から直線距離で約60キロ隔てた安達郡大玉村の仮設住宅の敷地内で、食料品や生活用品店を扱う店を経営している。

県土が東西に広がる福島県。富岡町のある海沿いの浜通りの住民にとって、阿武隈山地を隔てた県中央の中通りを訪ねる機会はそう多くない。大玉村はそ

郡山市街の仮設住宅で毎週水曜日午前に移動販売を行っている。心待ちにしている住民は多い

富岡町が誇る桜の名所、夜の森公園は、通称さくら通りと呼ばれ、約300本の桜並木となっていた。「えびすこ市・場」の入口には、その夜の森公園の桜の写真が掲げられている。それほど桜へのこだわりは強い。

の中通りにある。

渡辺さんにとっても、安達太良山の裾野に広がる大玉村は、「震災がなければ、一生訪ねることはなかったと思う」土地だという。

毎朝5時30分に出発 食料品と雑貨を満載して

渡辺さん自身の現在の住まいは郡山の南にある須賀川市。1日の行動はすべて商工会から調達した軽トラとともにある。

朝5時30分に自宅を出て、郡山で食料品や雑貨を仕入れた後、大玉村の店舗に7時に着く。準備をして、8時30分開店。その後9時30分ごろから村内の仮設住宅を〝御用聞き〟に回る。閉店が午後6時30分で、須賀川の自宅に戻るのが7時過ぎ。このほか週に1度、郡山の仮設住宅で移動店舗を開く。その移動も同じ軽トラだ。

大玉村の仮設住宅に住む富岡町民 200世帯のために出店を決意

渡辺さんの父・誠一さんが富岡駅前で食料品店を開いたのは昭和30年代前半のこと。自分の名前をとって屋号を「誠屋スーパー」とした。吏さんは4人兄弟の末っ子で、小学校のころから、この店は自分が継ぐことになるだろうと思っていたという。

震災当日、津波警報を受けて、渡辺さんは高台に逃げた。津波は1階店舗の天井まで達し、商品はほぼ流出。その後「原発が危ない」ということになり、家から現金だけを持ち出して川内村へ、その後須賀川へ避難した。

富岡町の住民全員が同じ運命を強いられた。約1万6000人いた富岡町民は全国津々浦々に散らばってしまった。そのうちの大玉村の仮設住宅周辺には、食品や雑貨を扱う商店がほとんどなかった。町は富岡町商工会に大玉村の仮設住宅での商店開設を進めてほしいと打診。渡辺

郡山の移動販売スタッフと富岡町商工会の星純一郎経営指導員（後列左端）

渡辺さんは海沿いの富岡町から中通りの須賀川に移り住んだが、これにより休日の生活が変わったという。「那須高原まで車で30分ほどで行ける。山や高原に足が向く機会が多くなった」と渡辺さん。

忙しい時間帯には店のスタッフ全員でお客さんに対応する

さんに白羽の矢が立った。

だが、渡辺さんは1人で店を立ち上げることに難色を示す。マーケットがあまりに小さいからだ。

「大玉村の仮設住宅入居者は約200世帯で、採算が取れないのはいうまでもありません。そこで浮上したのが、共同出資者を募ることでした」（富岡町商工会・星純一郎経営指導員）

商工会が出資者を募った結果、個人・法人計9件の出資を得た。昨年1月に店の経営母体である「合同会社富岡さくらの郷」を設立。渡辺さんを店長とする食料品・雑貨店が仮設住宅前にオープンしたのは、昨年4月26日のことである。店名は富岡町で毎年11月に行われる伝統行事「えびす講市」からとって「えびすこ市・場」とした。軽トラの貸し出し事業に応募したのは、コストを極力抑えるためだった。

仮設住宅内の配達でも軽トラを駆使

総勢10名のスタッフがいる販路拡大がとにかく急務だった

開店はしたものの、店の経営は厳しい。誠屋スーパーの売上と較べると4分の1だ。

誠屋スーパーが渡辺さん夫妻と姉の3人の家族経営だったのに対して、現在のスタッフは交代要員を含めて10人前後いる。彼らへの報酬を払うと、利益はほとんど出ない。

販路拡大が必要ではないかと考えはじめた矢先に、郡山市の中心市街地にある富岡町民向けの仮設住宅で、毎週1回移動店舗を開いてはどうかという話が舞い込む。市街地にあるとはいえ、仮設住宅の高齢者にとって

富岡町時代の仲間が渡辺さんの店の営業を支えている

昨年12月1日現在の富岡町民の避難先データによると、避難者総数1万5576人のうち約7割が福島県内に避難しているが、残り3割の避難先は全国各地で、福島県を除く全国46の都道府県にまたがっているという。

は移動が大変だから、仮設住宅内に出張店舗を出してほしい、という主旨だった。

こうして仮設住宅の中央にあるコミュニティ施設「おたがいさまセンター」前で、毎週水曜日に移動仮設店舗を出すことになった。この仮設店舗が好評で、いまでは開店前に行列ができることもあるほどだ。

どんな要望にも応える そのために、どうするか

「店主さんのこだわりなのか、『こんなものが買いたい』というリクエストに応えてくれるのがここの店の特長です。私もずいぶんお願いしました。サンマを1匹まるごと塩焼きでとか、きりたんぽ鍋食材セットを来週までにほしいとか……。こんなお願い、近所のスーパーではできませんよね」（常連のお客さん）

協力してくれるスタッフは富岡町時代から付き合いのあった仲間たち。手弁当で店を手伝う。

「ここは郡山市街なので、食料品や生活物資は比較的手に入りやすい。でも住民はみんな毎週水曜日を心待ちにしています。やはり移動が難しい高齢者の住民が多いことと、富岡町在住時代から顔なじみの方から買えるのがうれしいらしいんです」（仮設住宅内の関係者）

“御用聞き”として多くの住民に顔を覚えてもらえた

心が繋がる〝御用聞き〟だから 富岡住民の絆が結べる

「こういう話をすると世間様から怒られるかもしれないけど」

と前置きして、渡辺さんは現在の心境を語りだした。

「実は震災で富岡の店が営業できなくなって、心のどこかにほっとした部分もある。富岡で店をやっていたころは、私たち夫婦と姉の3人の家族経営で何とか回していたけれど、正直いって展望はなかった。例えば各戸を回っての御用聞きも人手が足りなくてできなかったんです。震災で店舗のなかは流されたし、町に戻れないのはつらい。でも気が付いてみると新しいスタッフに囲まれて、いまは楽しく仕事させてもらっている。家族経営であのまま続けていては味わえない充実感かもしれない」

郡山での移動店舗の成功を受

「何かほしいものは?」「サンマを塩焼きにして」「来週持ってきます」という会話が毎週交わされる

「仮設住宅に移って一番『しなくなった』家事が料理。台所が狭いし、自宅じゃないのでやはり気兼ねする。だから毎週水曜日に惣菜を持ってきてくれるのが嬉しい」（郡山市街の仮設住宅に住む女性）

えびすこ市・場の店内。夕方に備えて商品を補充中

けて、渡辺さんはいま、県内に散らばった富岡町民が住む拠点を回る移動販売の強化を模索している。「軽トラが富岡町民の心をつなげる」ということですね、との問いかけに、かぶりを振ってこう答えた。

「そんな美しいものじゃないですよ。確かに、自分のやろうとしている県内各地に散らばった富岡町民への御用聞きは、結果として町民同士の心をつなげることになるかもしれない。しかし根底にあるのは、利益を上げたいからです。食べていくためです。商売人ですから儲けてナンボ。商人の本能を目覚めさせてくれたのが、震災かもしれないし、軽トラかもしれない」

「スタッフの意見をよく聞く」と渡辺吏さん

ここで出会った人たちと商売をすること楽しむ

富岡町にいたころ楽しみにしていたことがあった。再開発が予定されていて、2018年には店舗兼自宅を手放すことになり、そのかわりまとまった額の補償金が入る予定だったのだ。

「僕ら夫婦は、補償金がもらえるまでがんばろう、と日々話し合っていた。震災で、その可能性がほとんどなくなってしまったのは確かに痛い」（渡辺さん）

だが一方でチームで店をやりくりする喜びを味わった。

富岡町の町としての完全復興の時期は読めない。渡辺さん自身、富岡に戻って店を再開できる可能性は非常に低いと考える。

将来を見据えると不安で押しつぶされそうになる渡辺さん。だがいまは新しく出会った人々といっしょに商売していることを純粋に楽しんでいる。

今年4月は大玉村での開店1周年。渡辺さんはその記念イベントの構想を温めている。

「えびすこ市・場」での売れ筋は惣菜。特に地元の郷土料理がよく売れる。「カツオの揚げ漬け」を作ったときは「僕自身も予想していなかったほどの人気でした」と渡辺さん。